

隱密七生記

吉川英治

隱密七生記
吉川英治

光風社
版

記 生 七 密 隱

昭和三十三年七月十五日 印刷
昭和三十三年七月二十五日 発行

定価 二九〇円

著者 吉川英治
発行者 豊島清史
印刷者 菅生定祥

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話 東京(29)〇二三八番
振替口座東京五六五二六番

目 次

鯨の眼玉の巻

天空番人

野火の鳥

眼玉を抜く

天来人間

遺言秘戦

情の狂人

お駒草の巻

笑わぬ口紅

石楠花の墓

抜帯を裂く

悪旅仲間

邪魔辰の巻

四二 四五 五三 五九

三九 三〇 二四 一八 二三 九

隠密の隠密

墓 膏

ひきずり街道

抜けぬ糸

鼬ごつ子の巻

背負い投

火放隠れ

摺れちがい

二度目の出会

湯女屋娘の巻

助太刀心中

鶴を趁う

嗤う兵法

白青磁

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

足の指

一四二

ういてんぺんの巻

生恥か死恥か

一四七

坂を下りる女

一五〇

孤寂な御後室

一五四

八ツ山立ち

一六〇

逆転

一六九

鳴海音頭の巻

二羽の鳥

一七四

舞坂迎え

一八〇

恋の切り札

一八七

酒は涙

一九三

乱舞の城下

一九五

意地と意地の巻

曳かれ者

恋は螢か

嫉みの秋草

あわれな恋猫

針吹く口紅

恐しき予言者

啼かぬ雁の巻

慌てた夜鳥

逢いそびれ

雁は共寝に

鉄砲箒

盗賊ぐるま

偽つばきの巻

二〇二

二〇九

二一三

二一八

二二三

二二七

二三三

二三五

二三九

二四三

二四七

苦界三界の巻

苦しい誓い	二五四
箱抜け魔人	二五七
夜毎の提灯	二六三
変化禅	二六五
不意な中止	二七〇
器用者ぞろい	二七五
御神体異変	二八一
悲雨惨々	二八六
鈴慕流し	二九〇
ぞめき冠り	二九六
膝に甘えて	三〇七
人間性善	三二三

隱
密
七
生
記

鯨^{しやち}の眼玉の巻

天 空 番 人

こんな日に、返り花が咲くのだろう。あたたかい冬の日だった。
名古屋城の八刻^{やっ}が鳴ると、間もなく。

「椿^{つばき}——支度^{しど}は」

と、いつものように、相役^{さげ}の相樂三平が、彼の家を、誘いに覗いた。

番士^{ばんし}の小路^{こうち}の組長屋である。

士分といつても、足輕に毛が生えたぐらいなもので、四十石^{しじく}、六十石、百石以下の家中の住居が、黒い塀を境にして並んでいた。

ちようど、奥では、椿源太郎も、袴はかまの紐ひもをしめかけていたところで、

「おう相さがら楽か、ちよつと待つてくれ」

と、書斎へはいつた。

その間に、源太郎の妹の信しのぶ乃は、茶器をそろえて、

「三平様、どうぞ」

と、容かたち姿よく、指をついた。

「ありがとう」

と、三平は、腰かけた儘まま、かの女の注ついでくれた茶へ手をのばした。

「あの手紙……見てくれましたか……」

「む……」

ふたりは、奥を憚はばつて、眼と眼で、何か、せわしい間の心を語りかけたが、すぐ書斎のふすまが開いて、

「や、待たせて済まなかつた。——妹、草履ぞうりを」

「はい」

と、信乃は、出し忘れていた兄の穿物はきものを、あわてて、揃そろえながら、

「行つてらつしやいまし」

と、見送つた。

「いい日和だなあ」

組屋敷の角を離れると、源太郎は、こうつぶやいて、小春日の真綿雲を仰ぎながら、

「こんな暖い日ばかりだと、お勤めも楽だが」

「一昨日か。ばかに、寒かつたのは」

「あの日は、美濃嵐しが吹いたからたまらない。骨の髄まで凍りそうだった」

「何しろ、平地でも、夜はこたえるのに、あの高い空だからな——」

「ム。高い」

と、今さらのように、二人は、足を止めて、一日おきに、半夜交代の勤務にのぼる、名古屋城の

天主の屋根を仰いだ。

ふたつの鯨が光っている。

日本無双の名城と、尾張大納言家の威を誇るように、地上数百尺の空に、黄金の女鯨と男鯨は、

巍然として、いつ眺めても、変らない。

これから又、あの鯨のそばに、夜半の交代まで、番人として付いていなければならないのかと思うと、源太郎は、自分の身のいとしまれる先に、生涯、うだつの上らない輕輩者の家に生れた信乃が、なんだか、可憐かつた。

黙々と、濊^{ほり}ばたを歩^{ひろ}いながら、

「相樂」

と、ふいに、言い出した。

「——こんな所で、急に話すのはおかしいが、貴公、おれの妹を、もらつてくれる気はないか」

「えつ、信乃どのを」

「そうだ」

相樂三平は、だまつて、足もとに眼を落した。

源太郎は、熱心に、

「おれもいつ迄^{まで}、番士組の端^{はし}くれに甘んじているつもりはないが、貴公には、失礼だが、見所がある。——おれもそう思っているし、妹も、ひそかに、考えているらしい」

「でも……」

と、三平はやや耳の根を紅くして、ことばが濁^{にご}つた。

「いつかも、打明けたように、拙者は、生涯この尾州家^{びじゅうけ}に、御奉公する気もちが無いのだから」

「そこがいいのだ。——この椿源太郎も、儘になるなら尾州家を離れて、何とか、少しはうだつの上の道を求めたいが、先祖からの関係で、そうも参らぬ。そこへゆくと、貴公はいい。一代奉公で、まだ尾張へ住み込んでから、四、五年にしかなるまい」

「ちようど、まる四年だ」

「いつ退役^{たいやく}しても、どこの藩^{はん}へ住み替えても、人が不審^{ふしん}に思わないだけ、貴公の方が自由だ。それに腕^{うで}はできるし、真面目^{まじめ}だし」

「そんなことをいわれると、面目^{めんぼく}ない」

「ほんとだ」

「いや、だめだよ」

「不束者^{ふつかも}で、無論、不足だろうが、彼女^{あれ}の気もちは、分つてくれるだろうと思う」

「……」

「どうだ、相樂」

「すこし、考えさせてくれ」

「もとより、今というわけじゃないが」

「む」

ふたりは間もなく、いつものように、天主閣の屋根へ上つて役目の場所に着いていた。——椿源太郎は、南の鯨のそばに、相樂三平は北向きの鯨のそばに。

野火の鳥

ふたりがそこに登っている時間は、夕方の申の刻（四時）から夜半の子の刻（十二時）までであった。

大天主の屋根の頂きは、石垣を加えると地上より百数十尺、知多の海はむろんのこと、濃尾平野の要地にある名古屋の城下はひと目である。

「六刻が鳴つたな」

「ウム、一刻経つた」

時々、北の鯢と、南の鯢のあいだで、ふたりは声だけを交し合つた。

陽が落ちると、急に、瓦はすべて氷のように冷えて来た。それに、恵那山脈から美濃を越えてくる風が、針のように、肌を刺す。

「寒い……」

と、南の鯢で、源太郎は思わず身ぶるいをした。

妹が、心をこめて着せてくれた、真綿の胴着も、この沍寒の空の夜風には、ものの数にも足りないものである。

返事がないので、かれは又、

「今夜も寒いなあ！ 相楽！」

と、有りツたけな声を出して言つた。